

ごめんね、竜

昭和五十七年度 六年女児

「竜が、死んだから早くこい。」

とあわてたように母が言った。私はハッとしたが、半分信じられなかった。

「本当に竜、死んだの。どうして。」

と私が聞くと、

「お父さんが朝、竜をはなしたろ、その時、竜が登校中の男の子をかんだんよ。それでお父さんおこって保健所につれていたんけ。」と母が言った。

「うそ、うそだろう。」

「本当だ。竜の小屋、見てきてみる。」

私はいちもくさんに、竜の小屋の方へ走った。小屋には竜の姿はなかった。

私は急に悲しくなり、竜がこないかと、しばらくそこに立っていた。私の目には自然と涙がたまってきた。本当に、もう竜がないのか。涙はどんどんあふれてきた。

竜は北海道犬で、毛が真っ白い犬だ。品評会の時だ

っていつも一位で、とってもたくましい良い犬だ。体はとっても大きくて、秋田犬とまちがえられるほどだった。さんぽのときも、自転車でいくとだまっていても、竜がひっぱってくれるほどの体力があった。それなのにとってもあまえんぼうな犬だった。私が竜をかまわないでいたり、もう一匹の犬にだけ遊んでやると、おこってその犬とけんかをします。そんな竜は私は大好きだった。

それだから、竜がどろまみれになれば私まで、真っ黒になりながら、体を洗ってやり、えさをやったり、ボールで遊んでやったり、病気の時は医者につれていたりした。そんな竜のことを考えていると、竜をこのことを、平気でやった父が、急ににくらしくなってきた。人間らしい、あたたかい血も涙もない、冷血人間なのかと、父に対するいかりがこみあげてきた。

しばらくして父が帰ってきた。私は、こみあげてくるいかりをおさえることが出来なかった。また涙が目にあふれてきた。

「お父さん、竜を保健所につれていったろう。」とはりさけるような声を私は父にぶつけた。

「お前達、朝、さん歩をしなかつたからだろ。」父の大きな声が返ってくる。私も負けずに

「だから、保健所につれていくことはないだろう。それに、バスケットとか勉強で、毎日なんかできるはずないじゃんか。」

「だから最初っから、かわない方がいいって言っただろう。」と父が返してくる。

「なんだよ。自分だってもう一匹かつたくせに。お父さんなんか、大っきらい。」と、はきすてるように、私が父をにらみ返すと、父の目にも、涙がうっすらと光っているのが分った。私は急に胸がおさえつけられるようなものを感じた。それから一言も話ができなくなった。私はただ、ぐっと歯をくいしばって下をむいているだけだった。父は二階に上っていった。

「お母さん、お父さん反省してみたいだよ。だって目が涙ぐんでたもん。」と私が言うと、母は、

「お父さんも悪かったと思っただね。竜には悪いけどあきらめよう。竜にはそういうふうに、神様からあたえられた運命だからね。」と目に涙をためて言った。

「うん。」と私。その時、少しは冷静さをとりもどして

いたが、やはりまた、

「竜のことはあきらめられない。」と、母をこまらせた。そして、

「竜だってもどのかい主の所で育っていれば、こんなことにはならずすんだかもしれないのに。」と私がポツンという

「そんなことはないよ。竜だって、あんなにかわいがられて幸せだったと思うよ。」と母がなぐさめるように、言った。今、考えてみれば、母もつらかつたんだなあとと思う。でもその時の私は、かなしくて涙をこらえても、こらえてもあふれ出てきた。今、竜に会いたくとも、会えないのだと思うと、本当にくやしく、なさけなく思う。私さえあの時、さんぽにつれて行ってれば、こんなことにはならなかつたのに、とくやまれて、また涙があふれてくるのだった。

「竜、天国に行つて幸せになつて下さいね。本当に竜、ごめんなさい。」